

グリーンカーテンの『環』県内各地へ

昨年度、十の地球温暖化対策地域協議会（以下、TEAM）と広島工業大学清田研究室、脱温暖化センターひろしまが連携し、グリーンカーテンによる温度上昇抑制効果を科学的に検証するプロジェクトを実施した。

今年度も、グリーンカーテンの更なる普及を目指し、学習会や現地測定、効果検証などに取り組んでいる。八月二日には、広島工業大学で開催した学習会には、今年度初めて取り組むTEAMを含む、TEAM十一人が参加した。まずは、AM一人が参加した。まずは、

メタボで年12万円医療費増も
メタボリック症候群の人の医療費が、そうでもない人よりも年8万～12万円多いことが厚生労働省の調査で分かった。医療費を増やす原因となった病名は調べていないが、高血圧などの生活習慣病が医療費を押し上げた可能性がある。

中高年が対象の「メタボ健診（特定健康診査）」の受診率は40%台と低迷しているが、医療費の差が具体的に示されたことで、生活習慣を改善してメタボ脱却を目指す人が増えそうだ。

医療費のうち、患者が医療機関で支払う自己負担額は、70歳以上が原則として医療費の1割、70歳未満が3割。自己負担が3割の場合、医療費の差が10万円なら自己負担額の差は3万円になる。

調査では、メタボ男性はそうでない人より40～49歳で医療費が年10万円程度多く、女性では70～74歳でメタボの人が9万円程度上回った。40～54歳の女性は差が17万～18万円程度だったが、厚労省は「この年齢層の女性にはメタボが少ないので、一部の医療費の高い人が平均を押し上げた可能性がある」とみている。

調査は、09年度にメタボ健診を受けた40～74歳の人のうち、10年度の医療費が判明した約269万人が対象。男女別に40歳から5歳ごとに年間の医療費の平均を算出。

メタボ健診では、内臓脂肪型肥満の腹囲基準（男性85センチ以上、女性90センチ以上）に加え、脂質異常、高血圧、高血糖のうち2つ以上が重なった人をメタボリック症候群としている。

◆「3R」など認知度高まる

環境省は、循環型社会と自然共生社会に関する意識をテーマにした「環境問題に関する世論調査」の結果を公表した。「3R（リデュース・リユース・リサイクル）」や「生物多様性」といった言葉の認知度が上昇し、意識の高まりがうかがえた。調査は、今後の環境施策の参考にすることをねらいに、無作為抽出した全国の20歳以上の国民を対象に個別面接で行い、1,912人が答えた。

循環型社会で3Rに対しては「言葉の意味を知っている」が33%、「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」が25%、「聞いたこともない」が41%だった。2009年6月の前回調査では「言葉の意味を知っている」が30%、「聞いたこともない」が45%で、意味を理解している層が増えた。意味を知っているのは、性別では男性、年代別では20歳代が多かった。

暮らしの中でごみを少なくする配慮やリサイクルをしているかという質問では、「いつも実施している」の35%と「ある程度している」の52%を合わせた87%が行き、「あまりしていない」12%と「ほとんど（全く）していない」1%の計13.0%を大きく上回った。ごみを少なくする行動は「詰め替え製品を使う」、「レジ袋をもらわない、簡易包装を店に求める」がそれぞれ59%だった。

自然共生社会に関しては、生物多様性の「言葉の意味を知っている」が19%、「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」が36%、「聞いたこともない」が41%となった。前回の調査結果はそれぞれ13%、24%、62%で、意味を知っていると、聞いたことがある比率が上昇し、聞いたことがない層は約20ポイント減と大きく減少。認知度は着実に高まっていた。意味を知っているのは男性が多い。

事業者の生物多様性保全の取り組みで重要なことは、「省資源、省エネ、3Rの促進」が最多で57%あり、「生物多様性への取り組み方針と実績を分かりやすく公表すること」が55%で続いた。生物多様性に配慮したライフスタイルで行いたいことは「節電や適切な冷暖房温度の設定など温暖化対策に取り組む」の72%、「旬のもの、地のものを選んで購入する」の58%の順となった。

◆時間50ミリ以上の豪雨、今夏は過去最多

気象庁は、今夏（6月から8月）にゲリラ豪雨を含む1時間50ミリ以上の「非常に激しい雨」を記録した回数が、統計を取り始めた76年以降で最多だったと発表した。「九州北部豪雨」など梅雨期間中の大雨が影響した。また、8月の全国の平均気温は過去3番目の高さで「猛暑の夏」も裏付けた。

気象庁によると、1時間に50ミリ以上を記録したのは、九州や四国のアメダスを中心とした239回。以前はアメダスの箇所数が少なかったことから、1,000地点当たりに換算して比較したところ185回となり、これまで夏の期間中で最多だった88年の同173回を上回った。50ミリ以上は「滝のように降る」とされる。

気象庁によると、梅雨期間中の降水量は、中国地方を除く西日本全域で平年より多かった。同庁は「短時間強雨は年々増加する傾向にあるが、地球温暖化の影響かどうかはまだ分からぬ」としている。全国の8月の平均気温も平年と比べ1.13度高く、1898年以降で3番目に高かった。最高気温が35度以上の「猛暑日」日数は、兵庫県豊岡市で32日間、埼玉県熊谷市で31日間に及び、いずれも過去最多タイだった。

（文責：地域活動支援センター）



8/1～
9/30

◆メタボで年12万円医療費増も

メタボリック症候群の人の医療費が、そうでない人よりも年8万～12万円多いことが厚生労働省の調査で分かった。医療費を増やす原因となった病名は調べていないが、高血圧などの生活習慣病が医療費を押し上げた可能性がある。

中高年が対象の「メタボ健診（特定健康診査）」の受診率は40%台と低迷しているが、医療費の差が具体的に示されたことで、生活習慣を改善してメタボ脱却を目指す人が増えそうだ。

医療費のうち、患者が医療機関で支払う自己負担額は、70歳以上が原則として医療費の1割、70歳未満が3割。自己負担が3割の場合、医療費の差が10万円なら自己負担額の差は3万円になる。

調査では、メタボ男性はそうでない人より40～49歳で医療費が年10万円程度多く、女性では70～74歳でメタボの人が9万円程度上回った。40～54歳の女性は差が17万～18万円程度だったが、厚労省は「この年齢層の女性にはメタボが少ないので、一部の医療費の高い人が平均を押し上げた可能性がある」とみている。

調査は、09年度にメタボ健診を受けた40～74歳の人のうち、10年度の医療費が判明した約269万人が対象。男女別に40歳から5歳ごとに年間の医療費の平均を算出。

メタボ健診では、内臓脂肪型肥満の腹囲基準（男性85センチ以上、女性90センチ以上）に加え、脂質異常、高血圧、高血糖のうち2つ以上が重なった人をメタボリック症候群としている。

◆「3R」など認知度高まる

環境省は、循環型社会と自然共生社会に関する意識をテーマにした「環境問題に関する世論調査」の結果を公表した。「3R（リデュース・リユース・リサイクル）」や「生物多様性」といった言葉の認知度が上昇し、意識の高まりがうかがえた。調査は、今後の環境施策の参考にすることをねらいに、無作為抽出した全国の20歳以上の国民を対象に個別面接で行い、1,912人が答えた。

循環型社会で3Rに対しては「言葉の意味を知っている」が33%、「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」が25%、「聞いたこともない」が41%だった。2009年6月の前回調査では「言葉の意味を知っている」が30%、「聞いたこともない」が45%で、意味を理解している層が増えた。意味を知っているのは、性別では男性、年代別では20歳代が多かった。

暮らしの中でごみを少なくする配慮やリサイクルをしているかという質問では、「いつも実施している」の35%と「ある程度している」の52%を合わせた87%が行き、「あまりしていない」12%と「ほとんど（全く）していない」1%の計13.0%を大きく上回った。ごみを少なくする行動は「詰め替え製品を使う」、「レジ袋をもらわない、簡易包装を店に求める」がそれぞれ59%だった。

自然共生社会に関しては、生物多様性の「言葉の意味を知っている」が19%、「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」が36%、「聞いたこともない」が41%となった。前回の調査結果はそれぞれ13%、24%、62%で、意味を知っていると、聞いたことがある比率が上昇し、聞いたことがない層は約20ポイント減と大きく減少。認知度は着実に高まっていた。意味を知っているのは男性が多い。

事業者の生物多様性保全の取り組みで重要なことは、「省資源、省エネ、3Rの促進」が最多で57%あり、「生物多様性への取り組み方針と実績を分かりやすく公表すること」が55%で続いた。生物多様性に配慮したライフスタイルで行いたいことは「節電や適切な冷暖房温度の設定など温暖化対策に取り組む」の72%、「旬のもの、地のものを選んで購入する」の58%の順となった。

◆時間50ミリ以上の豪雨、今夏は過去最多

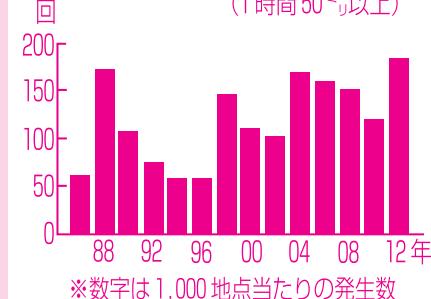
気象庁は、今夏（6月から8月）にゲリラ豪雨を含む1時間50ミリ以上の「非常に激しい雨」を記録した回数が、統計を取り始めた76年以降で最多だったと発表した。「九州北部豪雨」など梅雨期間中の大雨が影響した。また、8月の全国の平均気温は過去3番目の高さで「猛暑の夏」も裏付けた。

気象庁によると、1時間に50ミリ以上を記録したのは、九州や四国のアメダスを中心とした239回。以前はアメダスの箇所数が少なかったことから、1,000地点当たりに換算して比較したところ185回となり、これまで夏の期間中で最多だった88年の同173回を上回った。50ミリ以上は「滝のように降る」とされる。

気象庁によると、梅雨期間中の降水量は、中国地方を除く西日本全域で平年より多かった。同庁は「短時間強雨は年々増加する傾向にあるが、地球温暖化の影響かどうかはまだ分からぬ」としている。全国の8月の平均気温も平年と比べ1.13度高く、1898年以降で3番目に高かった。最高気温が35度以上の「猛暑日」日数は、兵庫県豊岡市で32日間、埼玉県熊谷市で31日間に及び、いずれも過去最多タイだった。

夏の短時間豪雨発生件数

(1時間50ミリ以上)



◆メタボで年12万円医療費増も メタボリック症候群の人の医療費が、そうでない人よりも年8万～12万円多いことが厚生労働省の調査で分かった。医療費を増やす原因となった病名は調べていないが、高血圧などの生活習慣病が医療費を押し上げた可能性がある。 中高年が対象の「メタボ健診（特定健康診査）」の受診率は40%台と低迷しているが、医療費の差が具体的に示されたことで、生活習慣を改善してメタボ脱却を目指す人が増えそうだ。 医療費のうち、患者が医療機関で支払う自己負担額は、70歳以上が原則として医療費の1割、70歳未満が3割。自己負担が3割の場合、医療費の差が10万円なら自己負担額の差は3万円になる。 調査では、メタボ男性はそうでない人より40～49歳で医療費が年10万円程度多く、女性では70～74歳でメタボの人が9万円程度上回った。40～54歳の女性は差が17万～18万円程度だったが、厚労省は「この年齢層の女性にはメタボが少ないので、一部の医療費の高い人が平均を押し上げた可能性がある」とみている。 調査は、09年度にメタボ健診を受けた40～74歳の人のうち、10年度の医療費が判明した約269万人が対象。男女別に40歳から5歳ごとに年間の医療費の平均を算出。 メタボ健診では、内臓脂肪型肥満の腹囲基準（男性85センチ以上、女性90センチ以上）に加え、脂質異常、高血圧、高血糖のうち2つ以上が重なった人をメタボリック症候群としている。 ◆「3R」など認知度高まる 環境省は、循環型社会と自然共生社会に関する意識をテーマにした「環境問題に関する世論調査」の結果を公表した。「3R（リデュース・リユース・リサイクル）」や「生物多様性」といった言葉の認知度が上昇し、意識の高まりがうかがえた。調査は、今後の環境施策の参考にすることをねらいに、無作為抽出した全国の20歳以上の国民を対象に個別面接で行い、1,912人が答えた。 循環型社会で3Rに対しては「言葉の意味を知っている」が33%、「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」が25%、「聞いたこともない」が41%だった。2009年6月の前回調査では「言葉の意味を知っている」が30%、「聞いたこともない」が45%で、意味を理解している層が増えた。意味を知っているのは、性別では男性、年代別では20歳代が多かった。 暮らしの中でごみを少なくする配慮やリサイクルをしているかという質問では、「いつも実施している」の35%と「ある程度している」の52%を合わせた87%が行き、「あまりしていない」12%と「ほとんど（全く）していない」1%の計13.0%を大きく上回った。ごみを少なくする行動は「詰め替え製品を使う」、「レジ袋をもらわない、簡易包装を店に求める」がそれぞれ59%だった。 自然共生社会に関しては、生物多様性の「言葉の意味を知っている」が19%、「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」が36%、「聞いたこともない」が41%となった。前回の調査結果はそれぞれ13%、24%、62%で、意味を知っていると、聞いたことがある比率が上昇し、聞いたことがない層は約20ポイント減と大きく減少。認知度は着実に高まっていた。意味を知っているのは男性が多い。 事業者の生物多様性保全の取り組みで重要なことは、「省資源、省エネ、3Rの促進」が最多で57%あり、「生物多様性への取り組み方針と実績を分かりやすく公表すること」が55%で続いた。生物多様性に配慮したライフスタイルで行いたいことは「節電や適切な冷暖房温度の設定など温暖化対策に取り組む」の72%、「旬のもの、地のものを選んで購入する」の58%の順となった。 ◆時間50ミリ以上の豪雨、今夏は過去最多 気象庁は、今夏（6月から8月）にゲリラ豪雨を含む1時間50ミリ以上の「非常に激しい雨」を記録した回数が、統計を取り始めた76年以降で最多だったと発表した。「九州北部豪雨」など梅雨期間中の大雨が影響した。また、8月の全国の平均気温は過去3番目の高さで「猛暑の夏」も裏付けた。 気象庁によると、1時間に50ミリ以上を記録したのは、九州や四国のアメダスを中心とした239回。以前はアメダスの箇所数が少なかったことから、1,000地点当たりに換算して比較したところ185回となり、これまで夏の期間中で最多だった88年の同173回を上回った。50ミリ以上は「滝のように降る」とされる。 気象庁によると、梅雨期間中の降水量は、中国地方を除く西日本全域で平年より多かった。同庁は「短時間強雨は年々増加する傾向にあるが、地球温暖化の影響かどうかはまだ分からぬ」としている。全国の8月の平均気温も平年と比べ1.13度高く、1898年以降で3番目に高かった。最高気温が35度以上の「猛暑日」日数は、兵庫県豊岡市で32日間、埼玉県熊谷市で31日間に及び、いずれも過去最多タイだった。	◆メタボで年12万円医療費増も メタボリック症候群の人の医療費が、そうでない人よりも年8万～12万円多いことが厚生労働省の調査で分かった。医療費を増やす原因となった病名は調べていないが、高血圧などの生活習慣病が医療費を押し上げた可能性がある。 中高年が対象の「メタボ健診（特定健康診査）」の受診率は40%台と低迷しているが、医療費の差が具体的に示されたことで、生活習慣を改善してメタボ脱却を目指す人が増えそうだ。 医療費のうち、患者が医療機関で支払う自己負担額は、70歳以上が原則として医療費の1割、70歳未満が3割。自己負担が3割の場合、医療費の差が10万円なら自己負担額の差は3万円になる。 調査では、メタボ男性はそうでない人より40～49歳で医療費が年10万円程度多く、女性では70～74歳でメタボの人が9万円程度上回った。40～54歳の女性は差が17万～18万円程度だったが、厚労省は「この年齢層の女性にはメタボが少ないので、一部の医療費の高い人が平均を押し上げた可能性がある」とみている。 調査は、09年度にメタボ健診を受けた40～74歳の人のうち、10年度の医療費が判明した約269万人が対象。男女別に40歳から5歳ごとに年間の医療費の平均を算出。 メタボ健診では、内臓脂肪型肥満の腹囲基準（男性85センチ以上、女性90センチ以上）に加え、脂質異常、高血圧、高血糖のうち2つ以上が重なった人をメタボリック症候群としている。 ◆「3R」など認知度高まる 環境省は、循環型社会と自然共生社会に関する意識をテーマにした「環境問題に関する世論調査」の結果を公表した。「3R（リデュース・リユース・リサイクル）」や「生物多様性」といった言葉の認知度が上昇し、意識の高まりがうかがえた。調査は、今後の環境施策の参考にすることをねらいに、無作為抽出した全国の20歳以上の国民を対象に個別面接で行い、1,912人が答えた。 循環型社会で3Rに対しては「言葉の意味を知っている」が33%、「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」が25%、「聞いたこともない」が41%だった。2009年6月の前回調査では「言葉の意味を知っている」が30%、「聞いたこともない」が45%で、意味を理解している層が増えた。意味を知っているのは、性別では男性、年代別では20歳代が多かった。 暮らしの中でごみを少なくする配慮やリサイクルをしているかという質問では、「いつも実施している」の35%と「ある程度している」の52%を合わせた87%が行き、「あまりしていない」12%と「ほとんど（全く）していない」1%の計13.0%を大きく上回った。ごみを少なくする行動は「詰め替え製品を使う」、「レジ袋をもらわない、簡易包装を店に求める」がそれぞれ59%だった。 自然共生社会に関しては、生物多様性の「言葉の意味を知っている」が19%、「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」が36%、「聞いたこともない」が41%となった。前回の調査結果はそれぞれ13%、24%、62%で、意味を知っていると、聞いたことがある比率が上昇し、聞いたことがない層は約20ポイント減と大きく減少。認知度は着実に高まっていた。意味を知っているのは男性が多い。 事業者の生物多様性保全の取り組みで重要なことは、「省資源、省エネ、3Rの促進」が最多で57%あり、「生物多様性への取り組み方針と実績を分かりやすく公表すること」が55%で続いた。生物多様性に配慮したライフスタイルで行いたいことは「節電や適切な冷暖房温度の設定など温暖化対策に取り組む」の72%、「旬のもの、地のものを選んで購入する」の58%の順となった。 ◆時間50ミリ以上の豪雨、今夏